修学旅行は終わらない

秋月達郎

秋月達郎　あきづき・たつろう

1959年5月15日生まれ。牡牛座、O型。早稲田大学卒業後東映に入社。『スケバン刑事』『はいからさんが通る』等のプロデューサーを経て、『鏡の中の私』で作家デビュー。他の著書に『鏡の中の私PART2—うしろのしょうめんだあれ—』『アルテミスの反乱—2039—』『ミルキー・ウェイ探偵団』『銀のスプラン・金のフラスク』『ユニコーン・アイランド』等がある。趣味は海外放浪＋温泉つきのスキー。調布市在住。

修学旅行は終わらない

秋月達郎
©Tatsuro Akizuki /Kitty Creative Inc. 1990
1990年8月20日　初版発行

発行人　**広橋　敏栄**
発行所　**株式会社　朝日ソノラマ**
東京都中央区銀座4-2-6
第二朝日ビル　〒104
振替　東京2-40311
電話　03-563-6021～3
印刷所　**株式会社光邦**
製本所　**光和製本株式会社**
Printed in Japan
落丁・乱丁本はおとりかえします

パンプキン文庫

修学旅行は終わらない

〝もしも天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを大きな乳の流れと考えるなら、もっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮かんでいるのです〟

――〈銀河鉄道の夜〉

第一楽章

NAOMI・PartI

わたしの瞳に乳白色の霧が映っている。

そして。

どれくらい前からか判断はつかないけど、或る一つの音楽のようなものが、聴こえはじめていた。

それがなんという名の曲だったのか、はっきりと思いおこすことはできない。いや、思いだすというよりも、いつか何処かで、確かに耳にしたメロディのような気がするだけで、おそらく、わたしがこれまでに一度も聴いたことはないと思われる旋律だった。

何処かの民族音楽のような気もする。

以前に聴いた黒人霊歌か賛美歌のような気もする。

だけど、それには、伴奏というものはなく――ア・カッペラってやつだ――中性的な声音を響かせているだけで、ジャマイカの波音ようなドラムも、アンデスの草を渡るような堅笛の音

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

も、バイオリンも、ギターも、ピアノも、奏されてはいない。

ともかく、バスの全体に――ううん――バス自体を包みこむように流れでてくるウィーン少年合唱団か、テルツ合唱団のようなこのスキャットは、妙にわたしの印象に残ろうとしている。

わたしはバスの中ほどに腰かけながら、たちこめはじめている朝霧に、視線を移した。

一筋に何処までも続いているような山間（やまあい）の道。両側には白樺が並木を形造り、人工的なまでにシンメトリック。その白樺の群の両脇から、透きとおるほどに凍てついた白い霧が、蒼々（そうそう）とした異様な光をうちに宿しながら、ゆっくりと道に這（は）いだしてきている。

宿を出発したときに仰いだ青空は、寒気を覚えさせるような霧のせいで、徐々に青い世界をせばめ、さっきまでアイドル歌手の唄に興じていた回りの生徒たちも、声を失ったように窓外の霧を眺めている。

わたしの名前は福田直美（ふくだなおみ）。愛知県清城（せいじょう）市にある県立柊（ひいらぎ）高校二年二組の修学旅行委員。

そう、今、わたしたちが乗っているこのバスで、信州一周の修学旅行、四日目の移動中なの。ほんとうなら、彼方まで広がっている八ヶ岳連峰を眺望できるはずだったのに、この霧には、まったく困りもの。

えっと。なんだかんだ言っても、ついに修学旅行がやってきました。このノートはバスの入

口に掛けておきますから、みなさん、旅行中に感じたことを書きこんでください。名前は、本名・ペンネーム、どちらだってＯＫ。ばんばん書いてくださいね。あ、そうだ。旅行のチャンスに恋の告白をしようと想ってる人たちに、我が柊高校の伝説を一つ、紹介しとくね。正門の前に並木道、あるでしょ？　あそこで再会の約束をした恋人たちは必ず結ばれるんですって。がんばっちゃおう。ってことで。このノートは旅行が終わったら、文集にして、みなさんにプレゼントの予定です。――なんとか旅行にこぎつけた修学旅行委員の直美でした。

修学旅行委員という名称を聞きなれない人のために、簡単に、わたしたちの高校のシステムを説明しておこう。わが柊高校では、二年生の秋に修学旅行が催されることになっている。それで、夏休みが明けると決って各クラスから二名ずつの修学旅行委員が選出され、その年度の修学旅行の計画から実行までの責任を負わされることになるわけ。

もちろん修学旅行のコースと日程については、三パターンほど、担当の教師から出されるわけだけど――これは学校と旅行社との間の契約によるものらしくて、能登一周、四国一周、信州一周とあった――そのうちで、わたしたちに選択の権限が与えられることになっている。

修学旅行委員の仕事は、コースの選択をクラス内の投票等で決めたあと、各宿の部屋割りから、当日ごとのスケジュール、修学旅行の手引きの作成、歌集の編纂（へんさん）なんかがあって、これが

意外に忙しい。

二学期が始まってから、この十一月中旬の修学旅行までの数カ月間、わたしは毎日のように居残りをして頑張ってきた。

大学進学率九十九パーセントの進学校の中で、二年生の秋という大事な時期に、修学旅行委員なんてクソ忙しい役目を担うなんて、馬鹿らしいことなのかもしれない。けれど、わたしにはわたしなりに理由ってものがあったんだ。

その理由というのが、まだ誰にも――このバスの中でも、わたしの隣に腰掛けている親友の丹保みのりにすら――話したこともないような……。

賭け麻雀目撃！

生活指導教官の本美敏夫大先生は日頃から我々の行動に眼を光らせているが、ついに、教師の実態を目撃した。一泊目の深夜、我々の麻雀パイを取りあげた本美先生は、我々が寝静まったのを見計らって、秀澄先生、矢野先生、川元先生を集めて、賭け麻雀で徹夜していたのだ。ちなみに飲んでいたアルコールはサントリー・ローヤルとキリン・ラガービールであり、秀澄さんはハコ。トップはもちろん本美先生。竹内教頭が不在のこともあり、この結果となった模様である。麻雀に勝った金でどでかいお屋敷をぶったてた竹内教頭の実力に本美先生が迫れる

かどうか、今後の動向が期待されている。――金田一小五郎。

「あれっ？　直美、そのウォークマン、水野くんと同じやつなの？」

辺りの霧にしみこむような音楽に気をとられていたわたしに、みのりが声をかけてきた。

「え？　ああ、これ――？」

わたしは聞くともなしに両手に包みこんでいたウォークマンを差しだした。

「そうだっけ――」

ぜんぜん知らなかったみたいな表情をしながら、わたしは答える。

知らないはずがない。だって、このウォークマンは、水野くんのものと同機種をわざわざ買ってきたんだから。

そう。わたしがなりたくもない修学旅行委員に立候補した、たった一つの理由――水野くんと二人で、仕事がしたかった――ってこと。

もともと、わたしは人前に立って仕事ができるような積極的な人間じゃない。どちらかといえば恥ずかしがり屋で、行動力にも乏しい、声も小さな女の子だった。高校に入学してからも、ずうっと、男まさりで涼しげな美人のみのりの蔭に寄りそうようにして、学校生活をおくってきたようなものだったんだ。

だから、人のいい水野くんが無理矢理に修学旅行委員にさせられたホームルームで、女子は誰にしようかって、担任の鈴木秀澄先生が言ったとき、思わず手をあげてしまったことに、一番びっくりしていたのが、みのりだったと思う。

夏の終わりから秋にかけて、わたしは、本当に楽しかった。これは嘘でも見栄でもなく、正直な気持ち。生物部全員で行った夏休みのキャンプなんて較べものにならないくらい、修学旅行後の文化祭の準備なんて気にならないほど、水野くんと二人で委員会に出たり――ときたま、彼はサボってたけど――夜遅くまで行く先のパンフレットを作ったりしているのは、ほんとうに、嬉しかったんだ。

水野くんは、下の名前を嘉徳（よしのり）という。ちょっと難しい字だけれど、性格が単純で明解な分、よく似合っているって思う。クラブはバレーボール部。背がそんなに高くないうえに、実はあんまり上手（うま）くないらしく、万年補欠。だけど優しさにかけては、クラスどころか学年で一番だって思ってる。

わたしの想いを水野くんが知ってるかどうかわからないけど、修学旅行が始まる前の日、水野くんは、わたしを買い物に誘ってくれた。隣町の某デパートで、ウォークマンを買うためだった。

『僕さあ、こういうのってよくわかんないから、選んでくれないかな』

彼の言葉にわたしは狂喜しながら、目を皿のようにして、いくつもの電気店を、水野くんと二人で闊歩した。

結局、カセットテープを挟みこむような、ＳＯＮＹウォークマンに決めて、わたしは彼と別れた。そして、一直線にひきかえして、同じ物を買ったんだ。

それが、この――。

「ちょっと借りてもいい？」

みのりが言った。

「いいけど――」

何故、あなたが、このウォークマンと同じ物を水野くんが持ってるのを知ってるの？

「さっきから流れてるこの曲、あまり好きじゃないんだ。なにか音楽聴いてもいいでしょ？」

「聴こえるの？　みのりにも、この音楽が？」

「あったりまえでしょ？　ボクはクラシック音痴だから、なんの曲かは知らないけどね」

みのりは自分のことをごく自然に〝ボク〟と言う。それがまた、ショートカットの彼女には、よく似合っている。カセットテープのはいった市松模様の手下げ袋から、みのりは〝クスコ〟のテープを取りだした。

「ねえ、みのり……この音楽……霧の中から、流れてきてるみたいな……気がしない？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そぉ？」

みのりは軽く聞きながしながら、ＰＬＡＹボタンを押した。

わたしは窓外を蠢く霧に、耳を澄ました。たしかに外から響いてくるような気がするんだけど――窓を微かに開けて、そっと手を出してみる。

「熱っ!!」

指から掌にかけて刺すような熱さが走った。あわてて手をひっこめると同時に、窓を閉める。

なに？――いまの熱さは？――霧以外に、触れたものは、なかったはずなのに。この白い水蒸気のカーテンは、霧にしか見えないけど、本当は別のものなのかしら――？

川元先生、奮戦！

がんばってたんだよお、川元先生。白樺湖にボート乗り場、あったじゃない？　あそこでさ。自分のクラスの連中集めて、男の子と女の子をペアにして、どんどん湖に送りだしてんの。なにがなんでも、この旅行中にカップルつくろうって思ってんのかしらね。でも、見ちゃったからねえ、織砂。そのなかにもぐりこんで将夫くんと二人でボート乗ってんの。ま、公認カップルだから、ゆるす。――かこちん。

「おっかしいなあ」
みのりの言葉に、わたしはビクッとして振りかえった。
「どうしたの？」
「このウォークマン、壊れてない？」
そんなこと、あるわけないわ。だって五日前に買ったばかりなのよ。
「電池がなくなったのかな？」
「違うよ、聴こえるもん。だけど、どうしてもこの変な音楽しか聴こえてこないの」
「そんな――」
わたしは自分の耳で確かめた。みのりの言うとおり、わたしたちを包みこんでいる、この曲しか聴こえない。
「どうなってるのかしら――？」
少しばかり不安を覚えて、また外に瞳を向ける。ついさっきまですれ違っていた対向車のフォッグランプも、いつのまにか姿を消している。バスは砂利道にはいったのか、なめらかだった振動を激しくさせはじめている。僅かに見えていた道路のガードレールが、白くボワァッと浮きたった。どうやら、九十九折りの断崖沿いに、さしかかっているみたい。
「霧のトンネルね、まるで」

みのりがポツンと呟く。

バスの車内は依然として静か。耳をおびやかすものは、さっきからの音楽だけ。前方を行くバスも、後方から来るバスも、まったく見えない。まるで外は古い映画のモノクローム画面みたい。

ゆっくりと車内を見渡す。窓外の霧を眺める生徒。本を読んでいる生徒。眠っている生徒。——水野くんは、すうすうと軽い寝息をたてている。彼の隣は、悪友の竹内将夫くん。彼のせいで、水野くんはいつも委員会をサボる羽目になっているらしい。

と、将夫くんを凝視している視線がある。

エキゾチックな顔立ちに栗色の髪をポニーテールにまとめている——宮崎織砂。

将夫くんは、彼女の視線を避けるように、異様な霧を眺めている。

わたしは深々とシートに身を沈めた。今は霧のおかげで、少しばかり空気が冷やかだけど、不思議に心は穏やかだった。修学旅行委員の仕事も、もうほとんど残っていない。今日の夜さえ無事に終わることができれば、明日は懐かしい清城に帰ることになる。

「あと一日かあ」

みのりが嘆息する。

そう。四泊五日の旅も、あと一日で終わる。もうこれで水野くんと二人だけの仕事もなくな

ってしまう。

嫌だなあ。帰りたくない。修学旅行が、このままずうっと、わたしが――もし実行するだけの勇気があればの話だけど――自分の想いを水野くんに伝えることができるまで、続いてくれるといいのに……。

MASAO・PartI

俺はもともと、人に好かれるタイプじゃねえとは思ってるさ。

学校内でなにかしらモメ事があるたびに、竹内将夫、竹内将夫って言われるんだからよ。

もちろん、全部が全部、濡衣（ぬれぎぬ）だなんて言ってるわけじゃねェ。校舎の三階からバスケットボールを落っことして体育教官で担任の鈴木先生が誇る〝かろおら・つー〟の天井をへこませたことや、女子更衣室の壁に穴を開けてマジックミラーを置いたことや、生徒会室の壁一面にいろんな先生の似顔絵を描いたことや、陸上部の部室で寝煙草（ねたばこ）をしてボヤを出したことや、東海陸上大会の三段跳びに出場したときに実は四段跳びをして悪いとは思いながらも優勝しちまったことなんかは、たしかに責任の一端はあると思うけどよ。

生活指導教官で二年一組担任の本美敏男大先生が、常に古ぼけた鞄の中にしまってあるブラックリストに載るほどの悪党じゃねぇとは思ってるんだな。

この間の濡衣なんか、そりゃもうひどいもんだったぜ。
市立図書館が不審火で全焼したときのことだ。いきなり生活指導室に呼びだされて、本美先生が俺に怒鳴りつけたんだ。
『図書館になにか怨みでもあるのか!?』
いいかげんにしてほしいよな。いくらなんだって、俺が唯一、愛しいマイルドセブンを吸える公の場、図書館に放火するなんて真似、できるわけねえだろ。
『まったく、親の顔が見たいぞ』
本美先生はいつも、そう言う。
『見てるじゃないですか。毎日』
そう言ってやりたいけど、東大寺かどっかの山門に立っている仁王像みたいな本美先生に対しては、サスガの俺もなにも言えない。
だけど事実なんだぜ。毎日見てるってのは。だってよ、俺の親父、俺たちの高校の教頭なんだからさ。
でもまあ、本美先生も偉いと思うよな。教頭の息子を、本人が見てる前でも怒鳴りちらすんだからさ。麻雀で親父に負けたことの鬱憤晴らしという説もあるが、この際、そういう下世話な考えは、胸のうちに深くしまっておくってことが、学問の先達に対する礼儀ってもんだ。

だけど俺だって、いつも、そんな濡衣を着せられて一人で黙って耐えてるわけにゃいかない。なにかおこられそうなときには、きまって共犯者を連れていくことにしてるんだ。

そいつの名前が、水野嘉徳。

なんであんなヤサ男が、女の子たちに人気があるのかは知らないけど――少なくともラブレターの三通はもらってるぜ――まあ、気はいい奴だからこそ、いつも悪事を一緒にひっかぶってくれるんだろうな。誰もが嫌がる修学旅行委員を、インチキ投票で決まったとはいえ、自ら進んでひきうけてくれるような男だし――。

ぱしゃぱしゃぱしゃぱしゃ。雨の音です。せっかくの修学旅行だっていうのに、三日目から雨模様。いやですね。天気予報を聞いてみました。そしたら、明日も雨だって。あ～あ。晴れないかなあ。でも、雨景色の信州もすてきです。――もっこ。

あっ。人に誤解されないうちに言っとくんだけど、いくら人に嫌われるったって、オンナの一人ぐらいはいるんだぜ。いや、いたんだぜと言いなおそう。物事ってもんは、きちんとしとかなくちゃいけねェ。せっかくの修学旅行だったけど、これまでにきっかけがなかったんだから仕方がない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com